国立国語研究所学術情報リポジトリ

A Dialect Geographical Study of Names for the “Praying Mantis”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳川, 宗賢, TOKUGAWA, Munemasa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001718

「カマキリ」の方言分布を解釈する

——糸魚川・青海方言調査報告7——

徳川宗賢

1. はじめに
　付：調査地域の概観
2. 分布の考察
　概観——ハイトリムシ——イボッツリムシ・セキムシ——ハイトリムシとイボッツリムシとはどちらが古いか——ゲンタロームシ——センタロームシ——カマキリ——1地点でしか聞けなかった形
3. まとめ
4. 補い

1. はじめに　小稿は，1957年の秋にはじまる一連の方言調査の結果を，まとめたものだ。

調査地域は，新潟県の西の端に位する糸魚川(イトイガワ)市と青海(オウミ)町（西頸城(ニシクビキ)郡）の全域およびそれに隣接する富山県下新川(シモニイカワ)郡の一部と，長野県北安曇(キタアズミ)郡の一部（旧北(キタ)小谷(オタリ)村全域）。この地域の総人口は1955年現在で約61,000人。

この地域に存在するすべての集落約180をもれなく訪れ，1名ずつの老人を選んで方言を聞きとった。調査は，柴田武・グロータースとわたくしの3名が分担した*。

小稿では，調査結果のうちから「カマキリ」の方言をとりあげ，言語地理学の立場から，その分布相を材料として現状に至る経過を推定しようとする**。

調査地域の概観　本論にはいる前に，方言分布の環境として重大な意味を持つ，調査地域の概観をのべよう。第1図を見ていただきたい。

1. この地域は，三方を山に囲まれ，海に面するわずかばかりの小平野には，**糸魚(イトイ)川(ガワ)市街**（5611•7453付近）と**青海(オウミ)市街**（5611•8179）という中心地がある。それぞれ糸

---

*　この調査には，柴田武が昭和32年度文部省科学研究費を受けた。

**　この調査の結果は，前記3名の共同研究により整理しつつあるが，「カマキリ」については，徳川が中心となってまとめた。したがって，小稿の責任も徳川にある。

魚川市と青海町の役場の所在地だ*。

小平野には，5本の川が南方の山地から北へ流れている。東から，**早川**（ハヤ）・**海川**（ウミ）・**姫川**（ヒメ）・**田海川**（トウミ）・**青海川**（オウミ）という。上流はそれぞれ谷を形成し，平野部から川沿いに，集落が山のふところまで列状に並んでいる。

この地域と外界を結ぶ，陸上の交通路は，三本しかない。日本海岸沿いに東西に通ずる旧**北陸道**と，糸魚川市街から南へのびる旧**松本街道**だ。谷谷にはそれぞれ道があるが，早川の谷**・海川の谷（旧**西海**（ニシウミ）村）・田海川の谷の奥は，行き止まりになっている。

2. **姫川**は，みなもとを50km南方の日本アルプス**白馬**（シロウマ）**岳**のふもとに発する荒い川だ。東側に**根知川**（ネチ）（その流域は旧根知村），西側に**小滝川**（コタキ），**大所川**（オオドコロ）（ともに旧小滝村）という支流がある。切り立った崖と岩をかむ急流は，人人の往来をさえぎり，川を渡って両岸を結ぶ交通は，ずっと上流および河口付近を除いて，ほとんどなかった。

この谷を南方信濃大町方面へ通ずる旧松本街道も，この流れに二つにさかれ，東西の傾斜に二本の別別の道を形づくっている***。東側を表街道，西側を裏街道という。

松本表街道は，糸魚川の市街から旧**大野**（オオノ）村の地域を通過し，根知川の谷を経由して**地蔵峠**（ジゾウトウゲ）**** を越え，長野県北安曇郡小谷村（旧**北小谷**（キタオタリ）村）の中心部へはいって行く。

---

* **地点番号の説明** この調査で使った調査地点の番号は，日本言語地図作成のため，国立国語研究所で用意した「方言調査基礎図」のシステムによっている。

図の外ワクに沿ってところどころにある5611, 5621……などの4ケタの数字は，この図面を6つに分ける太線で囲まれた地域の番号だ。太線は，細線で示された小さなマスをたてよこ10ずつ，合計100個を取り囲むもので，それぞれの地域は，地理調査所発行の5万分の1地形図1枚にあたる。調査地域の関係から，どの地域も100のマス全部が図面に出ていないが……。

小さなマスには，それぞれの地域のワクの中で，横書きの順に左上から右下に向かって00, 01, 02……99の数字が与えてある。たとえば，図のほぼ中央上の方，糸魚川市の文字のあるマスは，5万分の1地形図5611（図名は糸魚川）の74のマスというわけで，その番号は5611•74となる。

この調査では，一つ一つの小さなマスをさらに縦横10等分し，それぞれの100の網目の番号によって，調査地点を示した。網目には，マスの中で，やはり横書きの順に00から99までの数字を与える。たとえば，この図の海ぞい最西端に位する地点は—56とあるが—，新潟県西頸城郡青海町字玉ノ木（タマノキ）と言い，その番号は5620•1556ということになる。つまり，この地点は5620の地図（図名は泊）にあり，その15のマス，さらにそのマスの56の網目にあるわけだ（「方言調査基礎図」についてさらに詳しくは，国立国語研究所年報9を参照されたい）。

** この谷の5611・8703には**新町**（アラマチ），同8965には**音坂**（オトザカ）という小中心地があることに注意。それぞれ旧**下早川村**・**上早川村**の役場所在地だった。また，早川の河口東側にある，海に面した三つの集落は，旧**浦本**（ウラモト）村に属していた。

*** 現在は，川ばたの国鉄大糸線（1957年全通）と，それに平行する国道（1880年開通）とが使われている。

**** 県境から**真那板**（マナイタ）山のすそをまわる細道もあった。

松本裏街道は，糸魚川の市街からまず姫川を渡り，旧**今井**(イマイ)村の地域，小滝川・大所川の渓谷をぬって，北小谷村へはいって行く。

3. 図の右下に補った5621・85, 同86, 同95, 同96, 5631・05, 同06のマスは，本図の南にすぐ続く地域で，旧**北小谷**(キタオタリ)村の中心部だ。東岸の道路は，地蔵峠を越す松本表街道と，真那板山のすそをまわってきた脇道。西岸は，松本裏街道だ。

4. 青海市街の西，5620・07のマス付近の海岸を**親不知**(オヤシラズ)という。北陸道第一の難関だったところ，日本アルプスのすそが海に迫り，旅行者は，断崖と荒海との間に残されたわずかばかりの砂浜を往来したという。現在は国道(1885 年開通)・鉄道(1912年開通)ともに崖の中腹を走り，往時をしのぶよすがもない。

親不知の西，富山県との県境に**境川**(サカイ)があり，上流に**上路川**(アゲロ)という支流がある。この支流の奥には，青海川の奥との**坂田峠**を越える連絡路がある。親不知をさける間道として注意される。なお，境川ぞいに，富山県に属する集落5620・2653 (**大平**(オオダイラ))がある。今回の調査では，参考として，ここも調査した。

5. 5611・6672, 同7452, および5621・2510はいわゆる**未解放部落**だ。婚姻圏の関係などから，周囲と違ったことばを使うことがある。

2. 分布の考察

2.1 概観 第2図を見よう。1地点ないし2地点でしか使われない形を除いて考えると，この地域には，大ざっぱに言って*6種の方言が行われている。

(1)センタロームシ，(2)ゲンタロームシ・ゲンタイロムシ，(3)イボッツリムシ，(4)セキムシ，(5)ハイトリムシ，(6)カマキリの6種だ。

分布図を見ると，(1)センタロームシは，早川の谷の奥 ∧∧∧∧ の線で囲まれた地域，(2)ゲンタロームシは ═══ (ゲンタイロムシは ▬▬) で囲まれた地域，すなわち早川の下流と海川の上流地帯に広がっている。(3)イボッツリムシは ▼▲▼▲▼▲ の線で囲まれ，根知谷および地蔵峠を越えて北小谷の東岸まで，(4)セキムシは斜線の部分，第一に根知谷から大野へかけての地域に中心勢力があり，第二に旧松本裏街道の一集落，さらに早川谷にも他の形に混って点在する。(5)ハイトリムシは ＋＋＋＋ で囲まれ，まず北小谷の集落から旧松本裏街道ぞいに小滝川の集落まで，また，姫川の東岸にも真那板山のすそをまわる脇道に1地点この形がある。次に，この姫川の上流地帯からずっと離れて，

---

* 音声的なこまかい差異や，形態上のわずかな違い——たとえばゲンタローとゲンタロームシの違いなど——は，切り捨てて考えることにする。分布の解釈に無関係と考えたからだ。

親不知の西，新潟県最西端の２集落，さらにまた飛んで海岸の東の端，浦本にも１地点このハイトリムシの類のことばが行われている。

糸魚川・青海の市街を中心とする海岸に面した平野部（青海川の谷も含む）には，図には示さなかったが，もっぱら(6)カマキリが用いられている。いわば，平野部はカマキリの専用地帯だ。また，このカマキリは他の形と併用されつつ，この糸魚川・青海地域の各所，どの谷どの川の流域にも広く使われている。地点番号のみで特に符号のない地点は，カマキリという形のみを答えた所だ。

日本全域を見渡せば，カマキリの方言には，このほかにまだいくつかの類がある。たとえば，オガメ・トーロー・トカゲなど……。しかし，日本全体からいえば500分の１にもたりないこの糸魚川・青海地域にも，綿密な調査をすれば，このようにいろいろの形が，しかもそれぞれの分布地域をもって行われていることがわかり，興味深い。

2.2 ハイトリムシ カマキリ方言のこの地域における年代記を考えるにあたって，まず，どの形が最も古くから用いられていたかを考えよう。

わたくしは，その一つの候補はハイトリムシであったと考える。

分布図を見ると，このハイトリムシの領域は，三つの地区に離れ離れになっている。すなわち，姫川の上流地方と新潟県の最西端，および浦本だ。

では，この三つの領域は，それぞれ関連なくハイトリムシを使うようになったのであろうか。しかし，その公算はあまりない。この虫にハイ（蠅）を取る習性があるにしても，三つの地区でそれぞれ別個に，独立して同じ名を持つようになったとはまず考えにくい。すくなくとも，関連があったと考える方が自然だ。

それでは，関連があったとはどういうことなのだろうか。三つの領域間に，住民の移住があったのだろうか。それとも，この三つの領域は，たがいに社会的・文化的な，特別な結びつきを持っていたのであろうか，たとえば婚姻関係などで……。しかし，これらの考えは，現在の資料からはともに成立しそうにない。この地図のワクの外を通ってこの三つの領域を直接結ぶことも，東に妙

高火山群・西に日本アルプスという地勢を考えれば，もちろん成り立たない。

したがって，このハイトリムシの三つの領域は，過去において，この地図のワクの中で互に手をつなぎ，連続していたと考えなければならない。いいかえれば，糸魚川や青海の市街を含めて，海岸の平野部にも，過去のある時代にこの形が広がっていたと考えなければならない。これがもっとも自然な考え方だということになる。

そして，何か別の新しい勢力のために，古いハイトリムシは三方に追われ，連続していた旧領域は分断されてしまったのだ*。

2.3 イボッツリムシ・セキムシ ハイトリムシとならんで，古い言い方と思われるものにイボッツリムシがある。分布図でもわかるように，この形は現在あまり交通の便のよくない根知谷から，旧松本表街道を経て北小谷の東側までの地域で行われている。

イボッツルとは，この地方では「すねる・おこる」という意味だという。これは，この虫に触れると，カマを立てて向かって来ることに注目しての名だろう。

さて，イボッツリムシの分布を見ると，根知においてセキムシの分布とほぼ一致することが，注目される。これは興味深いことだ。しかし分布図をよく見ると，集落をとりまく周囲の傾斜のいちばん頂上寄り，いいかえればこの根知谷の最も不便なところは，イボッツリムシだけが使われ，セキムシのないことがわかる（たとえば5621・2653，同3636，同4500）など。これはイボッツリムシが，セキムシより古くからこの地方にあったことを示しているものに違いない。新しいセキムシは，もっともヘンピな所にまではまだ達していないのだ。また両形の併用される川沿いの多くの地点から，セキムシの方が新しい言い方だという報告があることも，イボッツリムシが古くからの言い方で，セキムシが新しい勢力であることを示していると考えられる。この二つの根拠から，わ

---

* ハイトリムシの類のうち，大所川流域にハイクイムシがある。これはハイトリムシの変形，この地点における偶然的変形と見てよかろう。

浦本のハイトリゲンゾは，二つの形の contamination と考えられ，前半はあきらかにハイトリムシの類だが，後半はよくわからない。ゲン……という点が共通するから，ゲンタロームシ・ゲンタイロムシと関係があるかもしれない。なお2.5参照。

たくしはイボッツリムシを古くからの勢力，セキムシを新しい勢力と推定する。峠を越えた北小谷に，イボッツリムシしかなく，まだセキムシの勢力が及んでいないことも，その推定のささえとなるだろう。

ところで，セキムシのセクというのも，実は「すねる・おこる」意味のことばだと言う。それならば，このセキムシという名は，意味から言えば，イボッツリムシと全く同じことになる。そこで，わたくしは，このセキムシはイボッツリムシの単なる言いかえだと考える。独断のように思えるかもしれないが，かりにヤマイムシとビョーキムシという二つの形が併存していたとしたら，言いかえだと考えるのは自然だろう*。

さて，現在のセキムシの分布を見ると，根知を中心として，そのほか(1)大野，(2)旧松本裏街道，(3)早川谷に点点にひろがっていることがわかる。では，現状の分布状態に至るには，どんな経過があったのだろうか。それには，次の二つの考え方があると思う**。

第1案　イボッツリムシは根知谷でセキムシに変り，その新しく生まれたセキムシが，まず姫川の東岸を下って日本海の浜に達する。さらにその勢力が二手に分れて，一方は旧松本裏街道，他方は早川の谷をのぼった……***。

第2案　過去のある時代，糸魚川の市街を中心とした海に面する平野部にイボッツリムシがあり****，それが放射されて山の方へ進んだ。その後いつか，現在根知谷で進行中のものと同じ改新があちこちで行われ，旧松本裏街道や早

---

*　なぜイボッツリムシが避けられ，セキムシに変って行ったのかは，わからない。

**　これらの各地点を特に強く結びつける社会的・文化的環境はないし，移住説も根拠がないことを念頭におくべきだろう。また，各地点で別別に互に関連なく，同じ命名が行われたとする考え方もとらない。

***　(1)　大野から対岸の旧松本裏街道は，直線距離ではすぐそばだ。しかし，姫川は荒い川だ。現在も河口をまわる交通路しかない。

(2)　セキムシが根知から海川の谷を経由して——海岸を通らないで——早川の谷へ広がったとも考えられそうだが，(1)の理由から，この形が海岸にあったのは確かだから，早川にも本道の河口からはいって行ったものと考えたい。

****　イボッツリムシの源を平野部とみる考え方とともに，根知を源とする考え方もあろう。イボッツリムシが根知からいったん海岸にまで下り，そこから改めて早川や松本裏街道をのぼったとする案だ。しかし，これは賛成しがたい。なぜなら，根知のイボッツリムシの分布が，かなり新しい相を示していると考えられるからだ。ごく古い昔から根知でこの形が用いられていたのなら，イボッツリムシはもっとくずれた，きれぎれになった分布を示すものと思われる。

川の谷では，セキムシしか見られない状態となった。その後，別の勢力が発生したため，海岸部ではこの形は消え失せ，山寄りの地方でも，根知谷を除いてほとんどその姿を消した……。

この二つの案のうち，どちらをとるべきだろうか。わたくしは第2案をとりたいと考える。早川にも旧松本裏街道にもないイボッツリムシが，その痕跡もない平野部にあったと考えるのは，あるいはちょっと奇抜にみえるかもしれない。しかし，それには理由がある。

まず，根知谷でイボッツリムシがセキムシに変ったのが，そう古い時代ではなさそうだということが参考となる。この地区で，セキムシがイボッツリムシより新しいという被調査者からの情報があったことは前にふれた。被調査者の言う，ことばの新古とは，彼らの経験しうる期間—明治以降と言いかえてよいかもしれない—に改新が行われたことを示すものと考えなければなるまい。被調査者の知識が，一方が16世紀のことばで，他方が18世紀のことばであるというような，歴史上の事実にまで及ぶとは想像できない。

それに対して，平野部にイボッツリムシないしセキムシがあったのは，そう新しいことではないらしい。すくなくとも，現存の人人の記憶にはない時代のことと考えられる。また現在セキムシの分布している地点をみても，そこまでこの形が広がるには，かなりの期間を要したと考えざるをえまい。

最近根知で生まれたセキムシが，かなり前の時代平野部に広がって行ったとする第1案は矛盾を生ずることになる。したがって，海岸にあったのはイボッツリムシだ。

また，早川谷には現在イボッツリムシはないが，ここにその痕跡と思われるものが存在することも，この考え方を助ける。それはイモムシだ。イボッツリムシがセキムシに変りつつあるとき，改新の道がそれてこの形が生まれたのではなかろうか。大野でもたぶん同一方向の変化が起ったのだろう，1地点イモムシがある。ここでもイボッツリムシが，セキムシとかわらず，音の類似するイモムシへ変ったのだろう。下早川にあるセキンボという形も，想像をたくましくすればイボッツリムシとセキムシの contamination かもしれない。

2.4 ハイトリムシとイボッツリムシとはどちらが古いか 2.2，2.3の推定によれ

ば，過去のある時代に，ハイトリムシとイボッツリムシのいずれもが，糸魚川の市街を中心とする平野部に広がっていたことになる。しかし，同時代・同一の場所で，二つの形が同じ勢力で用いられていたとは考えにくい。どちらかが古く，そしてどちらかが旧勢力を駆逐した新しい勢力だと考えなければならないだろう。

それでは，いずれを古いものと考えるべきだろうか。わたくしは，ハイトリムシが古くからの言い方であり，新しいイボッツリムシ（セキムシ）にその領域を追われたものだと考える。その根拠は……

第2図の旧松本裏街道，その今井から小滝川の流域までの所を見よう。奥の小滝川の流域にハイトリムシがあり，それより浜に近い1集落にセキムシがあることがわかる。もしイボッツリムシ（いまはセキムシ）が，この地点に古くあったものとすれば，あとから来たハイトリムシはそれを飛び越さなければ，山の奥へはいることはできない。これは不可能なことだ。したがって，ハイトリムシはイボッツリムシよりも早く，平野部を出発したものと考えられる。すなわち，ハイトリムシの分布は追われるものの姿であり，セキムシは追うものの位置にあると言える。

北小谷での両者の接触を見ても，同じことが言える。この分布は，ハイトリムシの領域に，旧松本表街道を経由して，イボッツリムシが新しく侵入したことを示している。この地域は，まずすみずみまでがハイトリムシであり，イボッツリムシは，ただ街道が人里にはいるトバクチだけにしかない。

2.2の終りのところで，ハイトリムシは新しい勢力によって三つの領域に分断されたと推定した。その新しい勢力とは，ほかでもないイボッツリムシ（セキムシ）だったのだ。

2.5 ゲンタロームシ それでは，ハイトリムシ，イボッツリムシ（セキムシ）に次いで古い形はどれだろうか。わたくしは，それはゲンタロームシの類だろうと考える。

ゲンタロームシの分布は，図でもわかるように早川の中流から下の方，および海川の上流地方だ。現在の分布をとるに至ったすじみちとして，二つの過程を想像しうる。第一に，早川か海川かどちらでもよいが，とにかく一方の谷で

この形が生まれ,それが細道を通って他の谷へ広がったとする考え方。第二に,海岸でこの形が生まれ——現在は,そこではすでに姿を没しているが——,山の方へ向かって両方の谷をさかのぼったとする考え方。

分布の姿からは,ただちにどちらとも決めかねる。この二つの考え方は,どちらも成り立ちそうに見える。しかし,わたくしは,第二の考えをとりたい*。この細道を経由して他の谷に言語の影響をもたらす例もないことはないが,やはり,川をさかのぼる道が本筋だろう。また,海岸浦本にハイトリゲンゾがあることも,かつてこの形が海岸にあったことをさし示すのではないだろうか。

2.2でもふれたが,このハイトリゲンゾは,多分二つの形の contamination だ。前半はハイトリムシ,後半はゲンタロームシの類と関連があると考えるのが,最も自然だろう。ハイトリムシがあったところへゲンタロームシの類が侵入して来たために,この形が生まれたものと考えられる。

ゲンタロームシは,現在かなり広い分布領域を持っているが,一部にゲンタイロムシ**という変種もある。また,海岸浦本にあるのは…ゲンゾだ。したがって,海岸にあったと推定されるいわばその祖形は,ゲンタロームシ,あるいはゲンタイロムシという形ではなかったかもしれない。海岸で生まれたときの形を,かりにゲン〜としよう。ゲンタロームシもゲンタイロムシも,またハイトリゲンゾもすべてこのゲン〜から生まれたものと考えるのだ。

さて,ゲン〜が,イボッツリムシ(セキムシ)より新しいとするのは,どういう根拠からだろうか。それは,早川におけるゲンタロームシとセキムシの分布を比較すれば,おのずからわかると思う。セキムシは,この地区でパラパラと点在するのに対して,ゲンタロームシは連続した強い地盤を持っている。点在

---

* ゲンタロームシの類が海岸にあったとしても,もちろん親不知の西から浦本まで,すべての海岸にこの形があったという意味ではない。現在の資料から,この形があったかと推定できるのは,糸魚川から東寄りの海岸だけだ。

** ゲンタロームシとゲンタイロムシとを比較しても,どちらが古いものかちょっとわからない。分布はゲンタイロムシの方が小さくまとまっているので,この地区での新しい発生のように見えるが,一方意味不明?なゲンタイロからゲンタロー(源太郎)へといった擬人化のすじみちも可能性がある。

もし海岸で生まれたときの形が,ゲンタロームシあるいはゲンタイロムシでなかったとするなら,両者の新古をウンヌンすることは,それほど重要でないことになると思うが,どうだろうか。

するのは古い形が犯されつつ残存する姿で，連続するのは新しい勢力の姿だ。

もちろん，点在する分布には，それが新しい勢力の新しい分布である場合もある。共通語が方言の中に侵入していく場合などがその一つの例だ。中央の強い勢力は，方言が隣りから隣りへと徐徐にその勢力圏を広げて行くのに対してまるで空からばらまいたように，各地に点点と新しい領域を作って行く。

しかし，セキムシの場合は，このケースとは考えられない。現在セキムシの中心領域は根知谷だが，早川のセキムシを，根知谷からの新しい侵入とは考えにくい。根知谷は，現在早川の谷に対して，文化的な強い影響力を持つような条件を備えていないからだ。したがって，早川谷のセキムシは古い層の露頭であり，ゲンタロームシを新しい層とするのがよいことになる。

2.6 センタロームシ センタロームシの分布は，早川谷の奥だ。そこで，分布の上からイボッツリムシ（セキムシ）あるいはゲンタロームシより古くからの形ではないかと，考える人があるかもしれない。イボッツリムシやゲンタロームシに追われて，山の奥だけにほそぼそと残る古い形と考えるのだ。しかし，この考えに対して，わたくしは別の案を提出してみる。すなわち，センタロームシは，セキムシとゲンタロームシの contamination とする考え方だ。

センタロームシの分布をさらに詳しくみると，早川の奥それも不便そうなところに，ポツポツと残っている姿ではないようだ。5611･89 のマス（そこに音坂という中心地があることに注意）から，周囲に放射しているように見える。放射の経由がたどれるのは，その放射が比較的新しい時代に行われたことを示していると考えられる。事実，工合のよいことに，5611･89 のマスのすぐそばに，セキムシとゲンタロームシが混在している。

また，セキムシとセンタロームシを併用している地点（たとえば5611･8930）で，セキムシを古いとする情報や，イモムシとセンタロームシを併用している地点（5611･8957）で，イモムシを被調査者幼時のことばとする情報があったことも，参考となる。これらは，センタロームシが新しい発生であることを教えているものに違いない。

この形が，他の谷で全く見られないことも，消極的にだが，この谷での発生とする考えのささえとなるだろうか。

2.7 カマキリ このカマキリは，ゲン〜よりも新しい，最新の形と考えられる。現在糸魚川・青海の市街地を中心に平野部に広がって，海川の谷・姫川の両岸をさかのぼりながら古い勢力を山の方へ追いやりつつある。

また，どの谷にも奥深く侵入しているが——たとえば早川の奥西側や，大所川の流域など——，これはこのカマキリが，現在非常に強い勢力を持ってこの地域に覆いかぶさっていることを示すものだろう。中心地糸魚川・青海の市街が，このカマキリだという原因ばかりではあるまい。おそらく東京を中心とする共通語の波が，この地域にも押し寄せつつあるのだろう。

たぶん近い将来，中央語の力を借りたカマキリは，この地域全域にさらに強大な根を広げて行くだろう。現状は，その方向をよく示している。

2.8 1地点でしか聞かれなかった形 以上で，この地域にかなりの勢力を持っている6つの形の考察を終った。次に，1地点でしか聞かれなかった形を，一つずつ検討しよう。

2.81 ハラタッテムシ 命名から言えば，これはイボッツリムシあるいはセキムシと共通点のある形だ。古いイボッツリムシは，2.3 で考察したようにセキムシに変って行く。これと同様に，この 5620・1765 にももとイボッツリムシがあり，それが——ここではセキムシでなく——ハラタッテムシに変ったのかもしれない*。

しかし，この命名がかなり自然のものであることから，この地点での自然的発生とも考えうる。この虫の特徴をつかんで，他の地点とは無関係に，ハラタッテムシという命名が行われたのかもしれない。上路川の上流にハラタッテムシがあることを材料として，過去のある時代に，青海の市街から青海川の谷にかけて（さらに峠を越えて）イボッツリムシがあったと断定するのは，チョット弱いように思われるがどうだろうか。

2.82 ハタケムシ ハラタッテムシと，音の面で似ていると言えば似ている。

---

* もしこの地点にも，イボッツリムシがあったとするならば，それは青海の市街から青海川の谷を通り，さらに坂田峠を越えてきたものにちがいない。海岸から境川をのぼる道には，ハイトリムシがあるから，その経路は考えられない。2.3 で推定したイボッツリムシの旧領域は姫川の河口までだったが，この案をとるなら，さらに西に親不知付近まで広がることになる。

イボッツリムシ（セキムシ）が，この地点でもハラタッテムシと翻訳され，さらにハラタテということばが何かの理由で避けられたため——意味不明となったため？——，音の似たハタケ（畑）となったのかもしれないが，想像説に止まる。結論として，未詳といわざるを得ない。

2.83 イタズラ この虫をイタズラするとイボッツル（セク）とでもいうのだろうか。それとも，イタズラそうな虫だというのだろうか。よくわからないので，やはり不明とするよりしかたがない。

なお，この形を得た地点（5621・2510）は，未解放部落であることに注意。

2.84 クサキリ カマキリと共通点のある命名と思われるが，よくわからない。

2.85 カミナリムシ カマキリと関係があるかもしれないし，「おこる」ということと関係のある名かもしれない。しかし，やはり未詳と言わなければならない。何か，この昆虫と雷とを結ぶ俗信でもあるのかもしれない。

なお，この報告を寄せたのは，被調査自身ではなく，1920年生まれのむすこであった。

2.86 タイコムシ これもよくわからない*。この虫が前足を振るさまを，太鼓を打つ姿に見立てた命名だろうか……。

ただ，この形のある場所が，早川の谷の奥だということは興味をそそる。この谷の特性から，この形がもしこの谷で生まれたのでないとするならば，この形は河口方面からはいって来たと考えなければならないからだ（調査地域の概観 1. 参照）。この形が，よそからもたらされたものならば，谷の奥でしか見出されないことを理由として，よほど前のことと考えなければならないだろう。ハイトリムシより古いものかもしれない。ハイトリムシ以降のプロセスは，いちおうスキマなく推定したのだから……。

3. まとめ 分布の考察から，わたくしは

---

* どれもこれも，未詳だ，不明だ，よくわからないとするのは，いかにもフガイナイように見える。しかし，これは一面この学問の本来の性格にもとづくとも言える。1で「分布相を材料として……」と書いた。したがって，1地点でしか報告の得られなかった形については——いわば分布相がはっきりしないのだから——，どうしてもこういう風になり勝ちだ。

(1)ハイトリムシ*⟶(2)イボッツリムシ(⟶セキムシ)⟶(3)ゲン～⟶
(4)センタロームシ⟶(5)カマキリ

という変化の順序を推定して来た。

しかし，この変化は主として糸魚川の市街を中心として起ったものであってこの地域全域にわたるものでないことに，注意する必要がある。

姫川の上流，北小谷を例にとってみよう。この地区では，ごく昔のことはわからないが，ある時代からハイトリムシが広く行われるようになり，そこへイボッツリムシが北から侵入して来た。現在の資料からは，これだけの変化しかわからないのだ。

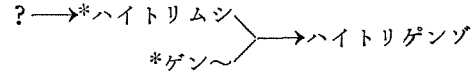
海川の谷，西海の奥などは，もっと極端な例と言える。現在のゲンタロームシ（ゲンタイロムシ）の前の時代のことは，それがゲン～だったかもしれないというほかは，すでに全く手掛りがなく，無資料という霧がわれわれの行くてをさえぎっている。イボッツリムシがその前にあり，ハイトリムシがさらに古い時代に，この地区で行われていたということも想像はできる。事実，ハイトリムシもイボッツリムシも，ほど近い平野部では行われていたのだから，この谷にも登っていたかもしれない。また，ゲン～はイボッツリムシの全盛時代より後に，海岸で生まれたと考えたのだから，平野部でイボッツリムシが用いられていた時代には，この西海でも，ゲン～でない何らかの形が行われていなければならないはずだ。しかし，わたくしは，現在の段階では，これに自信をもって答えることができない。それというのも，この分布図を見ている限りでは，これに答えうる資料がないからだ。

このように，カマキリ方言の年代記といっても，詳しく言えば各地区ごとにその事情が違ってくる。2. では，その点に細かく言及しえなかったうらみがあった。そこで，2. のまとめとして，地区ごと別別に，推定される変化の順序を図式化し，小稿のしめくくりとしよう。

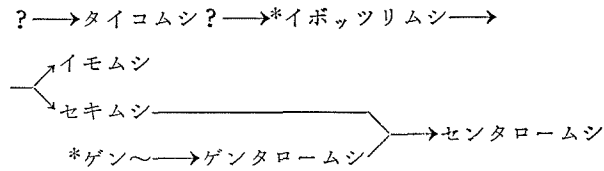
---

* もちろん，ハイトリムシの行われる前にも，この地方で何らかの形がこの虫に与えられていたに違いない。タイコムシであったかもしれないが，さらにそれ以前のことは，残念ながらわれわれの資料からは全然見当がつかない。

浦本：

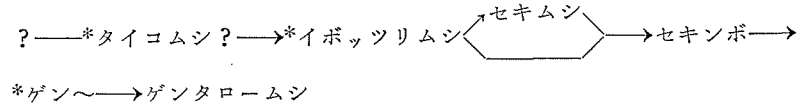


上早川：



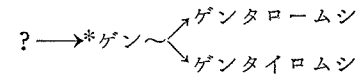
タイコムシが最も古い層であることには，疑問があるので？をつけた。イボッツリムシは，イモムシが現存することから，この上早川にも，ある時代には存在したものと考えて，＊はつけたが？はつけなかった。

下早川：



上早川のタイコムシが，もし外部からの輸入なら，かならず下早川も経由したはずだ。疑問はあるが，？と＊を付して系譜の最初においた。

西海：



糸魚川市街を中心とする平野部：

?⟶*タイコムシ?⟶*ハイトリムシ⟶*イボッツリムシ⟶*セキムシ?⟶*ゲン～

ここのタイコムシも，下早川のものと同じ意味だ。セキムシに？をつけたのは，次の理由による。イボッツリムシ⟶セキムシの変化は，平野部では起こらなかったのかもしれない，言いかえれば，この変化は，イボッツリム

＊　語形の頭＊印は現存しない形の推定を示す。？は疑いのあるもの。また各地区の年代記最後のところには，現在どこでもカマキリがつくわけだが，すべて省略することにする。

シが谷を上ってから後に起ったもので，そのころ平野部のイボッツリムシは，セキムシに変るひまもなく，すでに新しいゲン〜に征服されてしまっていたのかもしれないと考えたからだ。もしそうなら，セキムシは，いついかなる時期にも，平野部には存在しなったことになる。

大野：

？⟶*イボッツリムシ⟨イモムシ／セキムシ

過去のある時期に，大野にもハイトリムシがあったかもしれない。しかし無かったかもしれない。少くとも，あったとする根拠は何もない。大事をとって，系譜には加えなかった。これは，早川も西海も同様。

根知：

？⟶イボッツリムシ⟶セキムシ

系譜にハイトリムシを加えなかったのは，大野と同じ理由による。

今井：

？⟶*ハイトリムシ⟶*イボッツリムシ？⟶セキムシ

大野や根知とちがい，この今井は，現在のハイトリムシの3領域を結ぶ経路にあたるので，過去のある時期に，ハイトリムシが存在したものと推定する。現在のセキムシが，イボッツリムシから変化したのは，この今井でだったったのか，あるいは海岸の地方でだったのかわからない。もし海岸の地方でだったのなら，この地区に侵入して来たのはセキムシで，イボッツリムシは，ここに来る前にすでに姿を変えてしまっていたことになる。今井にイボッツリムシがあった事実はないのかもしれないので？をつけた。

小滝（小滝川・大所川の谷）：

？⟶ハイトリムシ

北小谷：

？⟶ハイトリムシ⟶イボッツリムシ

青梅（市街と田海川・青海川の谷）：

？⟶*ハイトリムシ⟶*イボッツリムシ・*セキムシ？

現在のハイトリムシの3領域を結ぶ経路であるところから，まず最初にお

いた。しかし，青梅川の谷の上流までハイトリムシがあったかどうかは疑わしい。イボッツリムシ・セキムシに？をつけて並べたのは，上路のハラタッテムシを，それらの言いかえかもしれないと考えたからだ。もしそうなら，この地区にも，かつてイボッツリムシあるいはセキムシがあったはずだ。

親不知の西：

？⟶ハイトリムシ

上路：

？⟶*イボッツリムシ・*セキムシ？⟶ハラタッテムシ

ハラタッテムシが，イボッリムシ・セキムシの言いかえなら，そのいずれかが，ここにあったことになる。すでにセキムシに言いかえられていたか，あるいはイボッツリムシのままだったかはわらないが…。ただ，やや疑わしいので？をつけた。ハイトリムシを加えない理由は，大野と同じ。

4. 補い 2.,3. でこの地域におけるカマキリの方言分布の解釈はいちおう終った。しかし，小稿では分布相を材料として各語形の変化の順序を推定することに専念して，なぜ古い形がすたれて行ったのか，また，新しい形はどんなキッカケで，どういう地盤から生まれて来たのかという問題には，紙数の関係もあってほとんど触れるところがなかった。これは，今後に残された第一の問題と言えよう。

なお，糸魚川・青海地域の方言調査については，機会を改めて総合報告書を発表する予定になっている。このカマキリ方言の分布の解釈も，他のいろいろの資料とつきあわせた上で，さらに検討するつもりでいる。 (1958・10・31)